

情報化・消費社会における コミュニケーションと自然

加藤 貞通

1 情報化・消費社会におけるコミュニケーション

情報テクノロジーと情報産業の発展が著しい今日、現在の水準にも勝る飛躍的に便利な社会についての様々な夢が語られている。夢には危惧が背中合わせであることが多い。人間と自然との関係、あるいは環境問題は、21世紀最大の問題の一つであるが、情報テクノロジーの発展とどう関わっているのか、危惧されることは何かを探ってみよう。できれば危惧を解消し楽しい自然との関係を回復したいものである。

今日の情報化・消費社会 (information-driven consumer society) は、人間の自然なニーズ (欲求) の水準を離陸し、はるかな上空で大量生産・大量消費・大量廃棄にふける資源浪費・環境破壊の社会である。その社会においてメディアによる情報操作は、次々に新たな消費欲望を創りだし、GDPが低下しないよう市場をコントロールするアクセルの役目を果たしていると言われている。消費は一種の言語活動で、他者との差異を確保するために絶え間なく発せられ受け取られる記号によるコミュニケーション活動に他ならない、とすら論じられている (ジャン・ボードリヤール『消費社会の神話と構造』121)。しかし個人間のコミュニケーション一般は勿論、マス・メディアが担うコミュニケーションも、コミュニケーションは本来浪費の道具だったわけではない。にもかかわらずメディア・テクノロジーが経済をあまりにも高速化しつつあるため、市場経済の速度と自然環境におけるエコロジーの速度とのバランスがとれない状況が出現している。そこで人間の市場経済と自然のエコロジーのバランスを回復するために、ドイツの環境学者エルンスト・フォン・ワイツェッカーは、エネルギーと資源の生産効率を50年以内に4倍にし、少ない資源消費で非物質的な豊かさを2倍に増す構想を打ち出している。(『ファクター4:豊かさを2倍に、資源消費を半分にする』) 更にフリードリッヒ・シュミット=ブレイクは、生産性を2050年までに少なくとも10倍以上に高める必要があると主張している。(『ファクター10:エコ効率革命を実現する』) 現在の市場経済はそれだけ自然破壊的で持続可能性が乏しいということである。一体どうしてこのようなことになってしまったのだろうか。コミュニケーション本来の働きはなんだろうか。コミュニケーションは、必ずしも浪費と自然破壊を加速する方向ばかりではなく、逆に持続可能性の方向へ働く可能性も持っているのではないだろうか。

コミュニケーション (communication) は様々な意味の拡がりを持つ言葉である。ま

ず日本語の辞典を見てみよう。『広辞苑』によるコミュニケーション（名詞）の定義は2通りである。

コミュニケーション

1. 社会生活を営む人間の間に行われる知覚・感情・思考の伝達。言語・文字その他視覚・聴覚に訴える各種のものを媒介とする。
2. 〔生物〕(ア) 動物個体間での、身振りや音声・匂いなどによる情報の伝達。
(イ) 細胞間の物質の伝達または移動。細胞間コミュニケーション。 (『広辞苑』)

次に英和辞典 (『ジーニアス英和大辞典』) によるコミュニケーション（名詞）の定義を見てみよう。こちらは6通りある。

communication

1. 伝える〔伝わる〕こと；(熱の) 伝導；(動力の) 伝播；(病気の) 感染。
2. (口頭・文書・合図などによる) 伝達、連絡；(ラジオ・テレビによる) 報道；(電話・電報) による通信、交信；(相互の) 意思疎通、交際、取引。
3. (伝達された) 情報、ニュース、通知；(送られてきた) 文書、通信文、伝言、学会発表論文。
4. 交通；交通機関、(汽車などの) 便。
5. 〔通例～s〕(電話・電信などの) 通信機関〔施設〕；(ラジオ・テレビなどの) 報道機関；(ドア・通路などの) 連結部；(道路・鉄道などの) 交通網、輸送機関；〔軍事〕兵站線、(前線基地との) 連絡線。
6. 〔～s、単数扱い〕情報工学〔技術〕；通信工学〔技術〕。

(『ジーニアス英和大辞典』)

『小学館ランダムハウス英和大辞典』もほぼ同じ内容の6通りの定義を与えている。交通や連絡網など広い定義が与えられているが、『広辞苑』の2番目の生物学における定義は英和辞典には見あたらない。

英和辞典による動詞形コミュニケート (communicate) の定義はどうであろうか。

1. (知識・情報などを) 伝える、伝達する、知らせる (impart knowledge of, make known).
2. (病気などを) うつす、感染させる (impart)；(熱などを) 伝える (transmit).
3. 聖餐にあずからせる、聖体を授ける (administer the Eucharist to).

4. 《古》共にする、あずかる (share in, partake of).

(『小学館ランダムハウス英和大辞典』)

語源はラテン語 *communicatus* (他人と共有した、知らせた) とある。コミュニケーション行為をする時、我々は知識や情報を相手に伝え、それを共有する。共有するものは知識や情報ばかりでなく、病気や熱でもありえる。「a. 共有の、共通の、公共の、ありふれた. / n. 入会権、共有地」を意味する「コモン (common)」という語は *communication* と共通の語源から派生している。3 番目の定義「聖餐にあずからせる」に対応する名詞は「聖餐、(霊的) 交渉 (*communion*)」という。「(親しく) 語り合う、(神・自然などと) 心を通わせる、交感する、聖餐式に参加する (*commune*)」もラテン語 *communicare* を語源としており、*communicate* と同族である。「自治体、原始共同体」の意味でも *commune* は使用される。「共同体、公衆、社会 (*community*)」も同族である。我々が、コミュニケートの4つの定義のうちどの意味であろうと、コミュニケートし、他者と何かを共有する時、そこには共同性が生じ、共同体 (コミュニティ) が生まれる。

英語の辞典による動詞形・コミュニケートの定義と同族語の拡がり、共有、共同体、社会に関わる意味合いが顕著である。『広辞苑』では、コミュニケートの項目は「意志や感情を伝えること」と簡単にかたづけている。前に見たように、名詞形・コミュニケーションも、外来語であるせいか英語辞典のような意味の拡がりを欠いているが、第2番目の定義として生物学的意味合いが与えられている点で興味深い。社会の意味が人間社会に限定されるように解される場合、コミュニケーションは言語によるコミュニケーションに大きな比重が置かれることになるが、人間以外の生物社会にまで範囲を広げた場合、日本語辞典の第2番目の定義のように、身振り、音声、匂い、細胞間の物質伝達という言語を超えた意味が入ってくる。そこでは、人間以外の生き物に社会は存在するのか、社会とは何かという議論も関わってくる。その議論では、これまで、人間以外の生き物は理性を持つか否かという点に核心が置かれてきた。また英和辞典の動詞形・コミュニケートの第3の定義は、宗教の領域に直結している。宗教の領域は言語による理性的理解を超越する点に最大の特徴がある。その意味で、生物学におけるコミュニケーションの定義と、宗教におけるコミュニケートの定義は、異なる次元にあるけれども近接しており、議論の端緒になりえる。

生態学 (*ecology*) は、人間以外の生き物も一種の社会、共同体を形成するということを前提にする科学である。英語辞典のコミュニケートの第4番目の定義「共にする、あずかる」対象が、水、食物、エネルギー、生命、土地、等々、生命維持に必要な基本的なものに近づくにつれ、コミュニケーションは生物世界のコミュニケーション、すなわちエコロジーと重なってくる。英和辞典によるエコロジーの定義は次の通りである。

Ecology n.1. 生態学：生物とその生活環境との関連を研究する生物学の一部門。2. 人間生態学、社会生態学：人工分布と施設、それから生じる相互依存関係を扱う社会学の一部門。（また oecology）（『小学館ランダムハウス英和大辞典』）

ecology (oecology) はギリシャ語 oikos (家) と logos (学) からエルンスト・ヘッケル (1834-1919) によって合成された 19 世紀の造語である。したがって語源からいえば家の学、すなわち家政学である。近縁の言葉に「エコノミー (economy)」がある。現在エコノミーは経済を意味しているが、古くは家政 (management of household affairs) の意味で用いられていた。語源はラテン語 *economia* で、更にそれはギリシャ語 *oikonomia* = oikos (家) + nomia (management 経営) に由来する。したがってエコロジー (生態学 ecology) と経済 (economy) は言葉の構成要素から言えば、ほとんど同じである。両者の違いは「家 (eco)」が何を指すかにかかっている。通常は、「家 (eco)」が人間社会を含む自然界全体、あるいはある地域の生態系を指す場合はエコロジー、人間社会のみを指す場合はエコノミーと使い分けている。そうすると広義のコミュニケーションは、エコロジーや経済の意味に限りなく接近する。この章の冒頭において、情報化・消費社会における消費はコミュニケーション行為であるという説を取り上げたが、コミュニケーションの意味範囲が経済にまで及ぶことが分かれば、その説が決して奇矯ではないと了解されるだろう。

このような意味の拡がりをする前にして、コミュニケーションを定義することは容易なことではない。一体コミュニケーションの学、コミュニケーション論ではコミュニケーションをどう考えているのであろうか。F.E.X. ダンスは次のようにコミュニケーションの概念をリストアップしている (D. マクウェールの要約による)。

1. シンボル、会話、言語
2. 理解—メッセージの送出よりも受容
3. 相互行為、関係—能動的な交換と共同志向
4. 不確実性の減少—適応のために情報の探索へと導く、仮説的な基礎的欲求
5. プロセス—伝達の順序の全体
6. 移送、伝達—空間と時間における意味の移動
7. 連結、結合—接続するもの、結合するものとしてのコミュニケーション
8. 共同性—共通に分け合い、保有するものの増加
9. チャンネル、伝送体、回路—通路や「乗り物」(記号体系や技術) にとくにかかわりのある「伝送」の拡張

10. 記憶、貯蔵—コミュニケーションは情報の蓄積をもたらし、われわれはその情報の貯え「によってコミュニケート」できること
11. 識別反応—選択的な注意や解釈のプロセスの重視
12. 刺激—反応もしくは反作用の原因としてのメッセージの重視
13. 意図—コミュニケーション行為の目的性性質の強調
14. 時間、状況—コミュニケーション行為の文脈への注意
15. パワー—影響の手段として見られたコミュニケーション

(林進編『コミュニケーション論』 2)

林はこのように15タイプのコミュニケーション概念を紹介したうえで、コミュニケーション論であつかう範囲は人間の社会的コミュニケーションであると限定し、「複数の人間の間の記号を媒介とする相互作用」とコミュニケーションを定義している。(林 5) 林の言うとおりに、通常コミュニケーション論が対象とするのは前述の定義の範囲内であるが、しかしそれは広範囲なコミュニケーションの意味のごく一部にすぎない。本論の冒頭で述べた情報化・消費社会におけるコミュニケーションはなぜ浪費の道具になってしまうのだろうかという疑問について、少なくとも一部は、上述の事情によって説明がつく。コミュニケーション論の対象とする領域、いわば守備範囲が狭すぎるのである。

2 社会・文化環境および自然環境の危機と身体性

エコ・コミュニケーション論が、環境に関わる問題を(1)社会・文化環境、(2)自然環境、および(3)主体性(／主観性 subjectivity)の3レベル間の相互作用として捉えようとする理由は、上に述べたように、考察の範囲を広げない限り環境の問題を論じることが不可能だからである。エコ・コミュニケーションのエコは、(1)社会・文化環境レベルにおけるエコノミーのエコと、(2)自然環境レベルにおけるエコロジーのエコの両方を指す。では何故(3)主体性(／主観性 subjectivity)の領域も考察対象に含めなければならないのだろうか。

日本文化に特徴的な自然観の把握は、アメリカ文化に特徴的な自然観を対比すると、容易になるように思われる。日本文化においては「身近な自然」志向が特徴的であり、対照的に、アメリカ文化では「遠くの自然」志向が特徴的である。「遠くの自然」は普通「原生自然」(wilderness: 訳語は「野生の自然」「荒野」など何通りかある)と呼ばれる非日常的・野生の自然を指す。「原生自然」のコンセプトは、大西洋の向こう側に自由の天地・新大陸がある、そこには無垢の自然があるという17世紀ヨーロッパの発想が土台になっている。「原生自然」の意味合いや価値は時代とともに変化するが、フロンティアの向こう側には人間の痕跡がほとんどない無垢の自然がある・そこには危険とともに自由

があるというイメージは一貫している。かつては「原生自然」がフロンティアの外側にあつたように、現在もそれは一般的人間社会とは区別された原生自然保護区として、人間社会近辺の自然とは異質な厳しい大自然として存在しているが、そのような自然はたいてい人間社会から遠く隔たったところにあると感じられ・考えられている。具体的にいえば、例えば西部の大平原、南西部砂漠、ロッキー山脈やシエラネバダ山脈と森林、コロラド峡谷、あるいはアラスカ北極圏などである。

オギュスタン・ベルクが『風土と日本』で用いた「居住域 (エクメーネ)」と「非居住域 (エレーム)」という用語で言えば、「遠く of 自然」は「非居住域 (エレーム)」にあることが前提である。そのような遠く of 大自然は、アメリカの歴史を動かす強力なダイナミズムを生み出してきた。国立公園制度を創り出し、世界に広めたのは、アメリカの原生自然志向に他ならない。ネイティヴ・アメリカンたちがこれとは全然違う自然観を持っていることは言うまでもない。「原生自然」が、アメリカ文化において常に人々を原点に立ち戻らせる文明論的批評の立脚点を提供してきた点も見逃せない。〈現在多数の人間が住むこの大都市も、かつては「遠く of 自然」だったはずなのに一体自分たちの作り上げた文明にはどういう意味があつたのだろうか〉と反省させる視点が、そこには含まれている。「非日常的・野生の自然」(wilderness) と結びつけて直ちに思い浮かぶ予言者型思想家が何人もいる。

「原生的自然」志向を代表する予言者型思想家たち：ヘンリー・デイビッド・ソロー (1817-62)、ジョン・ウェズレー・パウエル (1834-1902)、ジョン・ミューア (1838-1914)、アルド・レオポルド (1887-1948)、レイチェル・カーソン (1907-64)

***** (傍流として日常世界に野性がみなぎる風土性を重視するゲーリー・スナイダー、ピーター・バーグ、ウエンデル・ベリー等がいる)

対照的に日本文化に見られる特徴的な自然観は、生活文化の中に織り込まれた「身近な自然」を志向する点に特徴がある。「身近な自然」とは、ベルクが「居住域 (エクメーネ)」と「非居住域 (エレーム)」と呼ぶ二つの領域が隣接し、日常生活の中に非日常的野生の自然が織り込まれている文化形態を指す。ベルクが言うように、日本の文化はその中に住む人を季節や気候に対し敏感にさせる傾向を持っている。環境決定論および文化決定論的誤謬の中から和辻哲郎の「風土」論を救出したベルクの功績は大きい。ベルクによると「風土」は自然的であると同時に文化的であり、主観的であると同時に客観的、集団的であると同時に個人的な「通態性」(trajectivité) であり、「風土」を構成する諸項は「相互生成」(ピアジェ) し、「可逆的往来」(デュラン) の起こる関係にある。(ベルク 183-5)

日本の「身近な自然（風土的自然）」は、「原生的自然」のように文明論的批評の立脚点や傑出した予言者の人物を産み出さなかったが、日本各地それぞれに年毎の季節を巡る、また数十年の世代のリズム刻む、多くの行事、風習、自然と密接に関わる産業、工芸、遊び、宗教などを産み出し、各地域住民の感覚の中に日常生活のリズム調節機能を育んできた。アメリカの「原生的自然」が文明論的リセット機能を有しているとするれば、日本の「風土的自然」は日常生活リセット機能を有しているといえる。

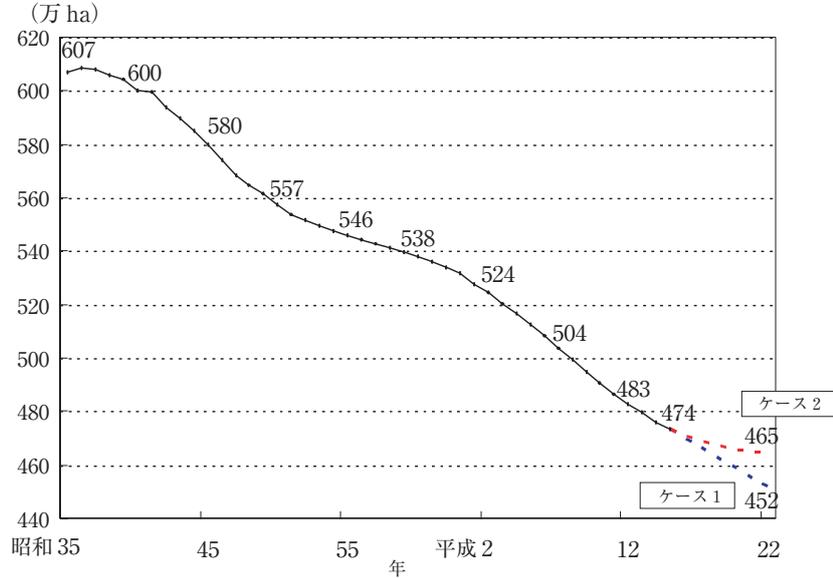
「風土」の定義をもっと単純にして、イーファー・トウアンがしたように「人々と、場所あるいは環境との間の、情緒的な結びつき」と言ってしまえば一般化し類型化が容易である。それをトウアンは「トポフィリア」と呼んだ。アメリカ文化の「遠くの自然」と日本文化の「身近な自然」のどちらも一種の「風土」であり「トポフィリア」だといえる。しかし「風土」という考え方は、自然や主体について無意識の深みから、物理的均質空間までいくつかのレベルで考察を可能にする点で優れているように思われる。

さて、この「身近な自然」は高度経済成長期（1955～1974の20年間、重工業化による「所得倍増」政策、機械化・規模拡大・化学肥料・農薬による農業近代化政策などが特徴的）ごろから大分おかしくなってきた。「国破れて山河在り」をもじって「国栄えて山河破る」という指摘は至る所で聞かれる。「身近な自然」の変調は山や川、海などの破壊から、衣食住に関わる農林水産業の衰退と食生活の変化に著しく現れている。客観的・関連データの一つとして農地面積の減少をあげることができる。農林水産省の資料（次ページ「3. 農地の概況」参照）によれば1960年以降の40年間に農地面積は607万ヘクタールから473万ヘクタールへ約2割130万ヘクタール減少した。（同期間に農家戸数600万戸→300万戸；農業就業者人口1400万人→280万人；食糧自給率79%→40%に減少。）また食料自給率の低下と並行して、耕作放棄地の増加も著しい。関連データは他にも、国家予算規模の膨張や国民所得の増加、道路や鉄道の距離の伸長、宅地面積や海岸埋め立て面積の増加、河川のダム建設状況、全国総合開発計画の推移、林業や漁業関連のデータ、貿易収支等、色々あげることが出来る。ただし農地面積の減少その他の外的なファクターは荒廃の原因と結果の両方であり得る。「自然的であると同時に文化的であり、主観的であると同時に客観的、集団的であると同時に個人的な」そのような風土的自然の問題に対処するには、客観的データと共に主観性（subjectivity）の領域を見過ごすわけにはいかない。

主観性（subjectivity）の領域を組み込む必要性を理解することは、コミュニケーション研究の原点に遡ることを意味する。コミュニケーション論の元祖としていま再び脚光を浴びているG.H. ミード（1863-1931）は、内一外、主観—客観、心—身の二元論を乗り越えようとして、A.N. ホワイトヘッド（1861-1947）の自然哲学に注目した。彼は、「自然とは、自然のなかに存在する諸々のパースペクティブの組織化である」という相対

3. 農地の概況

○農地面積の減少

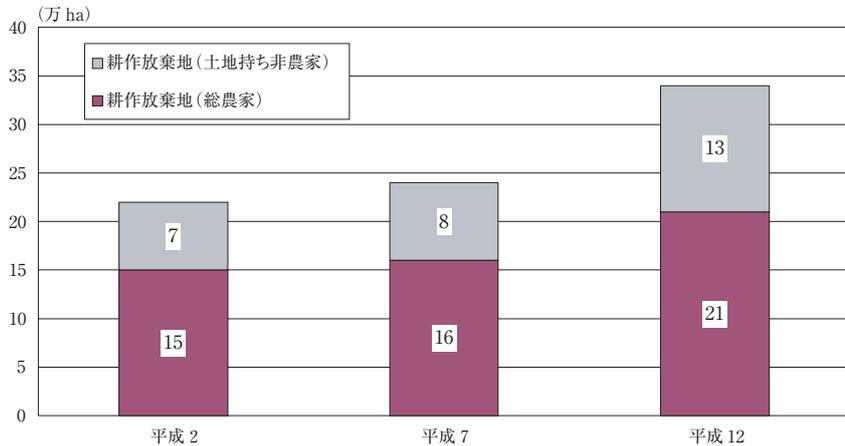


資料：農林水産省統計部「耕地及び作付面積統計」（平成15年までの実績値）

注1）：昭和48年以前には沖縄県は含まれていない。

2）：ケース1は、平成12～15年の3年間の減少面積の平均と同程度の面積が今後毎年減少するものと見込んだ場合。
 ケース2は、最近の農地面積の減少のペースの鈍化傾向を見込んで試算した場合。

○耕作放棄地の増加



資料：農林水産省「農業センサス」

注）農家とは、経営耕地面積が10a以上の世帯等をいい、土地持ち非農家とは、農家以外で、耕地及び耕作放棄地を合わせて5a以上所有している世帯をいう。

性理論に基づくホワイトヘッドの自然概念を取り出し、時間的な構造、すなわちプロセスとしての有機体が抱く時間的パースペクティブを空間のなかに取り込み成層化した自然という考えを得るに至った。

生物学は、それらのパースペクティブを、個体と環境という観点から取り扱ってきた。また生態学においては、諸環境の組織化が取り扱われている。しかし、生物学は、絶対空間・絶対時間のなかにある物質粒子という世界に譲歩してきた。しかもその物質粒子の世界は、有機体のどんな環境やどんなパースペクティブとも独立に存在する世界なのであった。[これに対して] ホワイトヘッド教授は有機体の概念を、どんな統一構造も含むように一般化する。そしてその統一構造の性質は、その構造がそれ自身であるための期間を要求するのである。したがってその統一構造は、空間的な構造であるだけでなく、時間的な構造、すなわち一つのプロセスでもある。そのような構造は、それがどんなものであれ、自然を、その交差によってその[構造自身の]パースペクティブへと成層化し、[時間と空間が区別されない]諸出来事の一般的な推移から、その構造自身の永遠的空間とその構造自身の時間とを分化させる。(ミード 96-97)

この自然観はミードのユニークなコミュニケーション論の土台として重要である。主観が客観の世界につながることの理論的土台があればこそ、彼は次のように主張することができたのである：「人間の知性が生じるのは、次のようなコミュニケーションの初期の段階である。すなわち、その段階においては、[一方で]有機体が自分自身のなかに他者の態度を呼び起こし、そのようにして自分自身に話しかけ、かくして自分自身にとって客体になる、つまり自我になり[他方で]他我が、自我を構成するのと同種の行為の内容によって構成される、そのようなコミュニケーションの段階である。この過程から思考が生じる」。(ミード 104)

〈身体的な関係性〉さて、エコ・コミュニケーション論に当てはめると、いま危機に陥っている「身近な自然」とは身体的な関係性だと見なすことが出来る。主体性を包含し、文化・社会環境にも自然環境にも及び、3分割し得ないものは身体性の他にはないからである。身体は一個の自然な有機体であると同時に、人間の作った文化的・社会的な存在であり、個人であると同時に多数の人間との関係の中で成立する存在であり、客観的であると同時に主観的存在である。コミュニケーション論は、人間どうしの言語によるコミュニケーションに偏りがちであるが、G.H.ミードは、コミュニケーション論の考察を動物の身体的なコミュニケーション(身振り)から開始したことはよく知られ

ている。彼は犬の喧嘩を観察したのである。主客二元論を乗り越えようとしていたミードにとって、身体への注目は当然のことであった。——ミードはアメリカのpragmatismに立つ哲学者であるが、pragmatismは「実用主義」というより「行為主義」と訳す方が適切だと、鶴見俊輔や相田敏彦は指摘している。(ミード 93-112、相田敏彦「社会的コミュニケーションの理論」林 37-80)

また「風土」論の元祖である和辻哲郎(1889-1960)も身体に注目している。彼は、ハイデッガーが人間の主体的存在構造を時間性と捉えるに留まったのは、ハイデッガーのDaseinが個人に過ぎなかったからであるとして、共同態という考えを導入することにより、主体的な時間性・空間性を見つけ出す。その際、彼は次のように述べる。

人間存在は無数の個人に分裂することを通じて種々の結合や共同態を形成する運動である。この分裂と合一とはあくまでも主体的実践的なものであるが、しかし主体的な身体なしに起こるものではない。(和辻 19)

和辻にとって「風土の現象は人間が己を見出す仕方」であって、単に自然科学的な意味の自然現象ではなく、また「人間」は単に社会学的意味の存在でもない。それゆえに、「主体的な身体」の関与が重視されるのである。このように、ミードのコミュニケーション論においても和辻の風土論においても、身体性は、主観と社会性・空間性・客観性のつながりを論証するうえで不可欠と見なされている。

オギュスタン・ベルクの風土(milieu)論は、実証主義が主観と客観を決定的に分離し、前者を後者に従属させてしまった袋小路を乗り越える努力をしている。ベルクは先ず次の3項目を三つの自明な命題—(1)風土は自然的であると同時に文化的である。(2)風土は主観的であると同時に客観的である。(3)風土は集団的であると同時に個人的である。—として確認する。そのうえで、風土考察に必要な工夫として「通態性」という概念を提唱する。

風土は「通態性」trajectivitéとして、すなわち風土を構成する諸項間の「相互生成」(ピアジェ)として、またそれらの項のあるものから他のものへの「可逆的往来」(デュラン)として考察されなければならない。この永続的な「通態」trajetから、常に精気に満ちた交差からこそ、生態学的・技術的・美的・概念的・政治的等々の性質を同時に持つ種々の営みが織り成され、そこからある一つの風土が作られるのである。(ベルク 185)

ベルクが風土の諸項間の相互性や可逆性を強調するのは、ひとつには彼自身の風土(mi-

lieu)論が、人種・環境・時代の理論を唱えたイポリット・テーヌ（1828-1893）を始めとするいろいろな理論家たちと同様に実証主義的風潮に流されて環境決定論に墮すのを警戒するからである。同時に、動物行動学者アイブル＝アイベスフェルトの指摘「人間のなかに万人にとって同一の自然が存することを否定するあまり、異なる文化に属する人間相互の、共感さらには交流の可能性を一切排除する文化主義に陥る危険」を避けるためでもある。

自然は、人間が自然を客体として心に描くという行為においてさえ、主体として生きている。社会が自然（ナチュラル）のなかに見るものは、社会自体の本性（ナチュラル）によって変化する。であるからこそ、日本人にとって自然とは何かを知ること、彼ら自身が何者であるかを認識することへと導くのである。（ベルク 5）

自然は社会・文化と不可分という考え方である。引用の最後の文は、前に引いた和辻の「風土の現象は人間が己を見出す仕方」を意識した文と思われる。また彼は、「文化も社会も、具体的な風土を形成する。」と指摘し、さらに次のように付け加える。

文化も社会も、実在の個々人を抜きにしては存在しないこと。各個人は、この世界ではあくまで生理学的な形で、社会的絆に肉体を与え、理念（イデオロギー）に脳髓を付与し、自らの手で技術を表現する、等々。（ベルク 158）

ベルクが述べていることは、和辻が、結合や共同態を形成する運動は「あくまでも主体的実践的なものであるが、しかし主体的な身体なしに起こるものではない」と述べた内容とほぼ同一である。つまりベルクもまた身体性に留意する必要を指摘しているといえる。

イーファー・トウアンはそれを「身体的接触」と呼び、現代生活においては自然環境との身体的な接触がますます間接的になり、また特別な場合に限られたものとなってきていると述べている。特に農民のトポフィリア的情緒が強いことに関して、こうコメントしている。

生きていくために、人間は自分の世界に何らかの価値を見出していかなければならない。農民も例外ではない。彼の生活は、自然の大きな循環と結びついている。それはすべての生き物の、生と生長と死に根ざしているのだ。そしてどれほど辛くとも、それは、ほかのどんな職業もほとんど対抗できないような重要性を、誇りにしているのだ。（トウアン 169）

同様にアメリカのニュー・アグリリアンと称される環境思想家ウェンデル・ベリー(1934-)も、身体性を重視する。彼のいう身体的な関係性は具体的・直接的なものであり、彼はそれを抽象的・間接的な関係性とは区別して「つながり」(connections)と呼ぶ。「つながり」は人間の共同体との社会的・文化的・歴史的「つながり」であると同時に、食べ物や土を通した物質循環のなかでのエコロジカルな共同体との「つながり」でもある。要約すると、物質の中に心が宿り循環する・生命の「つながり」を断ち切る工業的・社会的から、「つながり」を育てる農業的・社会的への転換がウェンデル・ベリーのテーマだと言ってもよい。

ベリーの場合、社会的・文化的・歴史的であると同時に生態学的な共同体成立の基盤として、土壌・土地・場所(soil, earth, or place)が重視され、それらは様々な「つながり」の交差するところと見なされる。歴史的に流動性志向の強いアメリカにおいて定住や土地との関係性を重視する点にウェンデル・ベリーのニュー・アグリリアニズムの特徴があり、またそこにこそ大きな潜在的インパクトが秘められているといえる。端的に言えば、遠くでの自然観が一般的なアメリカにおいて身近な自然観への転換を呼びかけているのに他ならないからである。(Wendell Berry "The Body and the Earth," *Unsettling*, 97-140)

冷戦構造の崩壊後、一極化した世界において情報化・消費社会が加速するにつれて、コミュニケーション・メディアと経済および環境の関係は、切り離せないものになった。21世紀におけるメディア・テクノロジーの急速な発展は、飛躍的便利さをもたらしつつある反面、グローバルな市場主義・大量生産・大量消費・大量廃棄を伴う情報化・消費社会の病理をいっそう深刻にし、地球規模の浪費・環境破壊と南北問題をさらに悪化させる危険性を持っている。

無論メディア・テクノロジーの発展に、希望が皆無というわけではない。インターネット、携帯電話、衛星放送、デジタルコミュニケーション・システム、その他のエレクトロニクス・テクノロジーは、世界中に情報受・発信機能を解放し遍在させる結果、世界は民主化され環境意識は高まり、皆豊かになる、同時に、ヴァーチャル・メディアは、地理や身体からの制約から人間性を解放し、人間は新しいアイデンティティを得、自由を獲得する、云々と、様々な楽観論も唱えられている。確かに、電子ネットワークによるコミュニティ意識の形成は、消費社会志向の流れを変える契機になるかもしれない。その点に希望はある。しかしながらコミュニティの仮想現実(ヴァーチャル)化は大きな問題を含んでいることを十分にわきまえて高度情報化時代に備えた方が良さそうである。

すでに過度に分業化された日常生活全般が、電子ネットワークを始めとする種々のメディアに依存し、ますます仮想現実化するなかで、もし適切な実践が伴わなかったとす

れば、確実に身体的なコミュニケーション能力に変調・衰弱は起きるだろう。すでに身体的関係性の仮想現実化による変調は起こりつつある。里山、里海、原っぱなど身近な自然の減少にともなう文化的空洞化、家庭や学校、職場、隣近所などにおける人間関係、つまりコミュニティ意識の空洞化、自然界の生物との生命共有意識の空洞化、人間の内的・根源的自然に対する自覚の希薄化にともなう主体性の空洞化、等々。これらの風土的自然における空洞化は、相互的な因果作用のプロセスのなかで、社会的・文化のおよび個人個人のバイタリティーとモラルの退廃をもたらさずにはいないであろう。

社会学者広井良典は、伝統的社会的コミュニティ（共同体）を解体して出発した近代社会は、公（政府、地方自治体）と私（個人・市場、私企業）の二領域構成になり、「共」を欠いた社会になってしまった、いま世界規模で市場経済活動が激化するにつれ本当の豊かさが問われ、福祉制度の再構築が迫られているなかで、二領域の中間にボランティア、NGO、NPO等の形で「共」すなわちコミュニティを形成する動きが現れていると分析している。（広井良典『定常型社会 新しい「豊かさ」の構想』ヴァーチャルで不確実な社会・文化環境の中で、分業化・専門化され・個というより断片に近い存在であることを余儀なくされた主体に欠けているものは、まさしくコミュニティに他ならない。そのコミュニティは、当然、公（政府）よりはるかに小規模に、地域の自然環境と社会・文化環境に釣り合うように、地方分権的に、かつ脱世界的に形成されることになる。広井の指摘するような動きの具体例は、確かに、身近に芽生えはじめている。福祉関係の多様なNPOの増加、農産物直売所などのローカルマーケットや生産者と消費者の提携方式の増加などは、「共」の芽生えを告げている。

以上を要約すると、身近な自然の再生には身体的な関係性・「つながり」（ベリー）—または「共同態」（和辻）、「通態性」（ベルク）、「共通のパスpekティブ」（ミード）、「身体的接触」（トウアン）—の回復が必要であるということ、また同時に、そのような身体的関係性を共有するコミュニティの回復が必要であるということができる。持続可能な世界をもたらすのはそのようなコミュニケーションではないだろうか。

(2005.2)

引用文献

- イーファー・トウアン『トポフィリアー人間と環境』小野有五・阿部一共訳、せりか書房、1992。
 オギュスタン・ベルク『風土の日本』篠田勝英訳、筑摩書房、1992。
 小西友七・南出康世編『ジーニアス英和大辞典』大修館書店、2001。
 ジャン・ボードリヤール『消費社会の神話と構造』今村仁司・塚原史訳、紀伊国屋書店、1979。
 小学館ランダムハウス編集委員会編『小学館ランダムハウス英和大辞典』小学館、1988。

メディアと文化 創刊号

新村出編『広辞苑』第5版、岩波書店、1988.

農林水産省「中間論点整理関係資料（データ集、用語集）」<http://www.maff.go.jp/keikaku/>

林進編『コミュニケーション論』有斐閣、1988.

広井良典『定常型社会 新しい「豊かさ」の構想』（岩波新書、2001）

G.H. ミード『G.H. ミード プラグマティズムの展開』加藤一己／宝月誠編訳、ミネルヴァ書房、2003.

和辻哲郎『風土—人間学的考察』岩波文庫、1979.

Berry, Wendell. *The Unsettling of America*. San Francisco: Sierra Club Books, 1997.